

尾崎紅葉における形容語での「可」の用字

——初期作品を中心に——

増井典夫

一、はじめに

東京人である尾崎紅葉の、近代日本語での研究上における重要性はここで改めていうまでもないであろう。

この尾崎紅葉の形容詞、形容動詞での漢字表記には、獨創性のあるものがある(1)が、ここでは、前の論文(2)に引き続き、漢字「可」を用いた形容詞、形容動詞の語の表記にポイントを絞って考えてみたい。例えば、次のような、

すばらし　ダイヤモンド

「可感い金剛石。」

おそろし　ひか　ダイヤモンド

「可恐い光るのね、金剛石」(『金色夜叉』前編一八〇—一九頁)

「すばらしい」を「可感い」、「おそろしい」を「可恐い」などというように表記する類いのものである。

本稿では、尾崎紅葉の初期作品『わかれ蚊帳』(明治23年・1890年)、『伽羅枕』(明治23年)に見られ

るものを中心に、「金色夜叉」「多情多恨」に見られるものと比較などをやりながら検討していく。

尾崎紅葉の代表作といえば、通俗的などという意見はあるだろうが、まず『金色夜叉』（明治30〜35年）を挙げるべきものと考ええる。紅葉の用字法の集大成が見られる作品でもある。ただ、言文一致の文脈では「多情多恨」（明治29年）が評価されるものであるし、この作品において紅葉の用字法の典型が見られるとも考えてよいではあろう。

さらに、東京語の研究資料としては両作品が重要なものとして挙げられるべきだということについては、以前拙稿でも述べたことでもあり、ここでは繰り返さない。

二、博文館版『紅葉全集』と岩波書店版『紅葉全集』等との校訂の違いについて

最初に、全集等に収められている本文の校異を挙げておく。

I 「わかれ蚊帳」の場合

初出は「江戸紫」第一号及び第七号である。「博文館」版、「岩波」版共に第一巻にこの作品を収めている。「可」を用いた形容語に関するものでは、次のような校異が見られる。

初出	博文館版	岩波版
----	------	-----

◎ おそ 恐ろしき(第一号95頁)	おそろ 可恐しき(第一卷560頁)	おそ 恐ろしき(第一卷289頁)
----------------------	----------------------	---------------------

Ⅱ『二人女房』(明治24～25年)の場合

初出は『都の花』第64号から第97号までである。「博文館」版は第一卷に、「岩波」版では第三卷に収録されている。「可」を用いた形容語の場合、次のような違いがある。

初出	博文館版	岩波版
① いけません(65号18頁)	いけま 不可せん(651頁)	いけません(237頁)
② こは 恐い(70号49頁)	こは 可恐い(692頁)	こは 恐い(261頁)
③ はづ 愧かしく(70号52頁)	はづか 可慙しく(696頁)	はづ 愧かしく(263頁)

④ しほらしい (84号2頁)	しほら 可憐しい (795頁)	しほらしい (326頁)
⑤ もど 悟かしがつて (84号10頁)	もどかし 可悶がつて (806頁)	もど 悟かしがつて (332頁)

なお、「新日本古典文学大系」の「尾崎紅葉集」に収められている本文は明治30年刊の雑誌「太陽」に収録された「再掲」本文によるもので、①から⑤の箇所は全て博文館版に見られるものと同じである。

よめいり

その他、岩波「全集」版の「解題」にも、「新日本古典文学大系」版の「脚注」にも指摘がないが、初出に「結婚」(「都の花」70号49頁)とあるのが、「新古典大系」本文・博文館版本文では「嫁入」となっているような違いも見られる。

また、博文館「紅葉全集」(初版明治37年)に収められている本文と岩波全集版とは次のような校異も見られる。「新色懺悔」(初出明治23年、初版24年)(初出は読売新聞)に見られるものである。

博文館版	おそろ	◎ 可怖しくて (第一巻487頁)
岩波版	おそ	怖ろしくて (第一巻248頁)

残念ながら、この『新色懺悔』については初版本では確かめられていないが、明治24年刊の再版本で見ると岩波全集版と同じ表記である。

日本語の研究においては、可能な限り初版本に当たるべきものであらうと思われるが、作品によってはそれが大変困難なものもある。尾崎紅葉においては岩波書店版『紅葉全集』が、初版本（単行本化されなかったものは初出）を底本にし、また忠実な校訂がなされていると認められ、この本文によつての研究を進めていってもよいものと考えるところである。

もちろん、博文館版の本文では、紅葉初期の表記ではない、紅葉晩年の表記の特徴（校訂に紅葉自身も関わっているとされる）がうかがえるわけで、それはそれで研究上意味のある資料と考える事は出来るであらう。

三、『金色夜叉』『多情多恨』における形容語での「可」の用字と

『わかれ蚊帳』『伽羅枕』等初期作品の場合との比較

まず先に、今回問題とする形容詞、形容動詞における「可」を用いた表記について、『金色夜叉』『多情多恨』において用いられていたものをへ表1へ表2へ示す。（用例のありかは前論文に示したので省略する）。

『金色夜叉』においては、明治31年から36年にかけて春陽堂から刊行された単行本の複製である、日本近代文学館の複製本文を使用した。

『多情多恨』においては、日本近代文学館所蔵の、明治30年に春陽堂から刊行された単行本の本文を使用し、岩波書店版『紅葉全集』第六巻所収の本文を参照した。

表において「◎」を付けたものは、「金色夜叉」「多情多恨」両作品で用例が見られるものである。(金)は「金色夜叉」のみで、(多)は「多情多恨」のみで見られる例であることを示す。

「可愛(かはいい・かはいゆい)」としている場合、「かはいい」と読ませる例と「かはいゆい」と読ませる例があることを示す。

「可」については、「よい」と「いい」の例は両作品に見られるものだが、このほか、「ええ」と読ませる例が「金色夜叉」に見られることを示す。

へ表1「金色夜叉」「多情多恨」での「可」使用の形容詞

ア行

- 可傷 (いたはしい) (金)
- 可痛 (いたはしい) (金)
- 可傷 (いたましい) (金)
- ◎可憐 (いとしい)
- 可伶 (いとしい) (金)
- ◎可忌 (いまはしい)
- 可訝 (いぶかしい) (金)
- ◎可疑 (うたがはしい)
- ◎可疎 (うとましい)

可忌（うとましい）（金）

◎可恨（うらめしい）

可怨（うらめしい）（多）

◎可羨（うらやましい）

可愁（うれはしい）（金）

可重（えらい）（多）

◎可恐（おそろしい）

へ可恐（おツそろしい）（金）

可懼（おそろしい）（金）

カ行

可輝（かがやかしい）（金）

可悲（かなしい）（金）

◎可愛（かはいい・かはゆい）

可好（このましい）（金）

可恐（こはい・こはらしい）（多）

サ行

◎可憐（しをらしい）

可感（すばらしい）（金）

◎空可恐（そらおそろしい）

タ行

◎可頼 (たのもしい)

可慎 (つつましい) (金)

ナ行

可慨 (なげかはしい) (多)

◎可懐 (なつかしい)

◎可惱 (なやましい)

可艱 (なやましい) (金)

可憎 (にくいへにツくき) (金)

ハ行

可羞 (はぢがましい) (金)

可羞 (はづかしい) (金)

可愧 (はづかしい) (金)

可耻 (はづかしい) (金)

可恥 (はづかしい) (金)

可慚 (はづかしい) (金)

可慙 (はづかしい) (多)

マ行

可難 (むつかしい) (金)

可睦（むつまじい）（多）

可悶（もどかしい）（多）

物可恐（ものおそろしい）（金）

ヤ行

◎可（よい・いい）

へ可（ええ）（金）

可喜（よろこばしい）（多）

ワ行

可煩（わづらはしい）（金）

不可（わるい）（多）

◎可笑（をかしい）

計48種の用字例が見られるものである。なお、「可憎」は「にづくき」の形でのものみ見られる。「可笑」では「をかしな（可笑な）」（『金色夜叉』後編73頁）という用法の例も見られる。

へ表2へ『金色夜叉』『多情多恨』での「可」使用の形容動詞

可憫（あはれ）（金）

◎可憐（あはれ）

◎可哀(あはれ)

◎可厭(いや)

可恐可驚(おっかなびつくり)(多)

◎可哀(かあいさう)

可也(かなりな)(多)

可楽(たのしみな)(金)

不可(だめだ)(多)

それでは次に、『わかれ蚊帳』『伽羅枕』における「可」を用いた形容詞、形容動詞を見る。

まず、『わかれ蚊帳』の場合である。

頁数は初出の雑誌「江戸紫」第一号(明治23年6月)に見られるもので、「可愁」(つらい)のみ「江戸紫」第七号(明治23年9月)に見られるものである。

〈表3〉『わかれ蚊帳』での「可」使用の形容詞

可喜(うれしい)(91頁)

可愛(かあい)(93頁)

可悲(かなしい)(91頁)

可愁(つらい)(102頁)

可憎（にくい）（91頁）
可笑（をかしい）（91頁）

なお、この作品においては「可」使用の形容動詞と見られるものは見あたらない。

さて、『わかれ蚊帳』は全集本だとほんの数頁しかない短編だが、様々な用字のものが既に見られることがわかる。ただ、右の六語のうち、「うれしい」に「可喜」と用字したものは『金色夜叉』『多情多恨』にはなく、「多情多恨」では「よろこばしい」に「可喜」と用いているし、「つらい」に「可愁」とは『金色夜叉』『多情多恨』では用いず、「金色夜叉」では「うれはしい」に「可愁」と用いている。このように、紅葉が表記において、いろいろと試行と模索を行っていたかとも思わせるものがある。

「可愛」であるが、ここでは「かあい」とルビを振っているが、『金色夜叉』『多情多恨』では「かはい」とルビを振っているものである。

次に『伽羅枕』のものを示す。頁数は、最初に用例の見られた箇所のもので、岩波書店版の『紅葉全集』第二巻での頁数である。

「可愛（かあい・かわゆい）（6頁・23頁）」としている場合、「かあい」と読ませるのが「6頁」に、「かわゆい」の例が「23頁」に見られたことを示す。

〈表4〉『伽羅枕』での「可」使用の形容詞、形容動詞

可怪（あやしい）（108頁）
可傷（いたはしい）（42頁）
可忌（いまはしい）（65頁）
可憂（うい）（44頁）
可愛（かあい・かわゆい）（6頁・23頁）
可憐（かはゆい）（9頁）
可恐（こはい・こはらしい）（15頁・54頁）
可怖（こはい・こはらしい）（116頁・104頁）
可愁（つらい）（26頁）
可憎（にくい）（106頁）
可笑（をかしい）（20頁）

〈形容動詞〉

可哀（あはれ）（17頁）
可憐（あはれ）（47頁）
可厭（いや）（5頁）
可哀（かあい）（47頁）

かなり豊富な用字例が既に初期作品から見られることがわかる。

このうち「可怪」「可憂」「可怖」の例は『金色夜叉』『多情多恨』には見られないものである。「かはゆい」に「可憐」を用いた例も『金色夜叉』『多情多恨』にはなく、「あはれ」または「しをらしい」に「可憐」を用いている。

その他、「新色懺悔」では「可憐(しほらしい)」（岩波全集第一巻251頁）、「可厭(いや)」（同253頁）といった例、『二人女房』では「可恐(こはい)」（『都の花』65号23頁）といった例が見られる。

ところで、紅葉の出世作である『二人比丘尼 色懺悔』（明治22年）には次のような例が見られる。（頁数は『日本近代文学館』の初版複製本によるものである）。

可愛（かあい）	らしい	（75頁）
可哀（かあい）		（91頁）
可憫（ふびん）		（91頁）

既にこの段階から紅葉は表記の試行と模索を始めていたかとも思わせる。『金色夜叉』では「あはれ」の表記の一つに「可憫」という表記を用いている例があるが、「ふびん」に「可憫」と用いる例はないのである。

四、おわりに

本稿でも前稿同様、調査結果の報告とまとめに留まり、ほとんど考察らしきものは出来ないままに終わってしまっているが、今後さらに調査検討を加え、考察を進めていきたいと思っている。

課題として、この「可」を用いた形容詞、形容動詞の用法は、いったいいつ頃から見られるものなのか、紅葉以前に多く用いるような作家がいなかったのか、という点の調査確認が残っている。少しずつでも調べてゆき、検討していきたいと考えている。

また、「可懐(なつか)しい」という表記は明治期において広く行われていたものだという。これが、現代においては使われない表記となっているのだが、いつ頃まで使われた表記か、いつ頃から使われなくなっていくのか、等の考察も課題として残っている。今後さらに検討を続けたいと考えている所である。

〈注〉

- (1) 拙稿「形容詞へえらい」の出自と意味の変遷」(『文芸研究』117、1988・1)、同「形容詞へえらい」の勢力拡大過程——近世にみる新語の普及と定着——」(『淑徳国文』32、1991・2)、同「明治期口語研究の新展開に向けて——標準語と保科孝一、尾崎紅葉、そしてヘトル・ヨル——」(『国語論究』9 現代の位相研究)所収、明治書院、2002年)等参照。

- (2) 拙稿「尾崎紅葉における形容語での「可」の用字について——『金色夜叉』『多情多恨』の場合——」。